

デカルト哲学における延長体の本質について

秋 山 良 伸

はじめに

本論は完成期のものと見なすことのできるデカルト哲学における延長体の身分を、その本質に関して問うことを目的とする。ここで私が延長体と言うのはラテン語本文で *extensum* と呼ばれているものであり、延長ないし延長することがその主要属性であるとされる実体のことである。

デカルト哲学とは一方に物質を置き他方に精神を置く物心二元論の哲学である、ということは今さら語るまでもないことである。どのような関心から、なおもこの哲学における「延長体」の身分を問う意味があるとわれわれが考えているのかをまず述べておきたい。

延長体の身分をめぐるのは、初期の方法論的・認識論的試論である『精神指導の規則』（以下『規則論』と略記）と『世界論』以降の主要著作との間に学説上の変化があるということがしばしば指摘されてきた。延長体の把握に関して『規則論』になお残っていたアリストテレス—スコラの経験主義は後の主要著作においては影をひそめ、純知

性的な本質把握の主張が前面に出てくる。そしてこうした知性化が、『規則論』には見られなかったような事物の本質についてのわれわれの認識の妥当性をめぐるさまざまな形而上学的弁明を、デカルトの主要著作に要求しているようにも見えるのである。

物質的事物の本質認識をめぐる学説の変化を示すために都合であると思われる箇所の一つは、第二省察における蜜蠟の分析である。そこでは、蜜蠟がそれ自体として何であるかということの認識には感覚も想像力も役に立たず、ただもっぱら「精神による洞見」がなされるだけである、と論じられている。また、後に本論でもいくつか触れるように、物質的事物の本質認識が完成期の著作において知性化されているとみなすための参考例は少なくない。しかし実際のところ『規則論』から完成期の哲学にかけて、物質的事物の本質認識をめぐるそのような意味での学説の変化はないのではないだろうか。たしかにこの問題をめぐって、用語法の変化や力点の置き方の変化、のみならず考え方のものにおける変化も、『規則論』と完成期の哲学との間に見られはする。しかしそれらの変化は、物質的事物の本質認識に関して感覚や想像力が介入した経験をまったく排除するにいたるような変化ではないとわれわれは考える。当時主流をなしていた「まず感覚の内になかったものは知性の内にもない」といった経験主義的知識論に対して、ある種の知識の経験に対する非依存性を強く主張しようとするあまり、デカルトの議論はときに知性偏重的なものになっているように思われる。そのため、主要著作での外的実体の本質把握に関する諸議論においては、感覚なし想像力は、デカルト哲学全体の展望においてそれらの能力が占めるに値すると思われる地位から必要以上に退けられているように思われるのである。以下ではこうした興味から、延長体の本質認識をめぐるデカルトの議論を読み直してみたい。そしてデカルト哲学における延長体の本質認識のあり方を問うとは、科学的知識のあり方一般を問うと

いう問題にもつながってゆくものであるとわれわれは考えている。

本論では次のような手順を取ろうと思う。まず始めに『規則論』から完成期の著作にかけてのデカルトの議論の変化のあり方を確認し、それに続けて、完成期の著作におけるデカルトの主張の意味をあらためて考えていくことにしたい。延長体についての言及はデカルトの著作においてさまざまな関連のもとでなされている。そのすべてに触れることはできないが、最低限本論に関わる部分として、われわれの解釈に対する否定的論拠となりそうな二つの論点についてあらかじめわれわれの考えを手短に提示しておこうと思う。その後に主要な議論として、一、延長（延長体の属性としての）とは非可感的性質であるとはどのような意味で言われるのか、二、延長とは物質的実体の一般的あり方（基本的属性）であるとはどのような意味で言われるのか、を論じたい。また、そこでの議論のまとめとして、デカルト哲学において言われる微小物質のあり方について概括的に考察するつもりである。

なお、本質認識の妥当性をめぐる形而上学的弁明の試みが『規則論』には見出されず、その後の主要著作においては見出されるということについても、本論の最後で簡単に触れることにしたい。

一、『規則論』における認識論から完成期の著作にかけての変化

デカルト初期の未完著作である『規則論』はいくつかの認識論的な議論をその中に含んでいる。そうした認識論的な箇所においてデカルトは、アリストテレス—スコラの伝統に連なるような想像力論を採用しており、延長体はどのような想像力との関わりにおいてとり扱われている。『規則論』における自然観はすでに多分に自然即延長体という

幾何学的自然観であるが、それ自体としては非延長的自然とされる知性と延長的自然との間にあって、両者の接点となる役割を負わされているのが共通感覚および想像力である。共通感覚は外的物体の運動によってあたかも蜜鐵に印が押されるかのように刻印を受け、その形象は想像力を経て知性へと伝えられるとされる（第十二規則）。

『規則論』のこうした議論においてわけけても重要であると思われるのは、第十四規則の説明の中で示される次のようなデカルトの見解である。「量について一般的に理解されたことを、かの量の形相〔特殊、*species*〕に移すならば、少なからぬ利益があるであろう……そしてこの量が物体の實在的延長であり、形をもつもののほかのあらゆるものから分離されているということ、これは規則十二で述べたことの帰結である。——彼処でわれわれは、想像それ自身が、その中に宿る観念もろともに、延長をもち形をもつ實在的な物体にはかならず、と考えたのだから⁽¹⁾」。延長は想像力においても物質的事物においても一義的に、實在的な性質であると言われている。しかし後のデカルトが感覚の生理学をより詳細に練り上げ、微小物質の運動によって感覚器官への衝突刺激が生じ、その刺激は動物精気の運動を介して脳へと伝えられると考えるようになるとき、『規則論』におけるこの見解はそのままでは維持できないものになるはずである。それにもかかわらず『規則論』でのこうした議論において見られる原則的な方向性すなわち、われわれが延長体の性質として知るところのものはリアルな性質であると考える方向性は、主要著作においてなお維持されているのではないかということを、われわれは後にあらためて考えてみたい。

『規則論』における上記のようなアリストテレススコラ的認識論は、後の主著、たとえば『省察』などにおいては姿をひそめることになる。自然即延長体という幾何学的自然観がより明確に打ち出される一方で、そうした延長体の認識が問題となる場面において想像力が果たすべき役割については、『規則論』の場合ほどはつきりしてはいな

い。共通感覚にいたってはまったく言及されなくなっている。そのかわりに物質的事物の本質認識に関する主だった議論においては、そうした本質は感覚や想像力によってではなく、ただ知性によって（精神の洞見によって）のみ知られるのである、と主張されるようになる。⁽²⁾以下、主要著作に見られるこうした主張の意味を考えていくことにしたい。

二、デカルトが感覚の欺瞞性を主張するのはどういう意味においてであるのか

ということの確認——否定的論拠についての検討（一）

ここではまず、もっとも一般的な問題として、完成期のデカルト哲学において感覚的知識が不確実なものとして切り捨てられるのはどのような角度からのことであるのかを、『省察』をテキストとして確認しておきたい。感覚的知識に対する懷疑はすでに第一省察冒頭から始められている。物の形や大きさ、火の熱さ、自分の身体の現前、睡眠と覚醒との区別といったさまざまな錯誤の例を経て、デカルトが感覚的知識についての一応の結論として述べるのは、感覚的観念（対象との関係からひとまず切り離された意識内容のことをデカルトは単なる観念と呼んでいる）⁽³⁾はそれ自体として虚偽を含むものではなく、誤りは「私のうちにある観念が私の外に存する何らかの事物に類似している」という判断のうちにあるのである、ということである。⁽⁴⁾われわれの意識における感覚的観念の現れは、とりわけ後に第六省察でみられるようなその不随意性のゆえに、何物か私の外部にあるものがそうした観念を私に送っているであり、それらの観念はその本源である対象のあり方を私に示しているのであると思わせる。しかしそうした信憑はし

ばしば裏切られもするのであり、われわれの知識形成における原理的な地位を担わせることのできるものではない。以上のような形でデカルトは、第六省察において感覚的知識の本性を再考するまでひとまずは感覚的知識の妥当性を退けるのであるが、『省察』冒頭でのこの議論の運びは、感覚的観念それ自体がわれわれの知識形成のうちで、デカルトがここで退けているのとは別の形で何らかの寄与をなしうするという可能性を残していると言える。実際われわれのもつ知識の内容は、端的に経験的な種類のものであるか、それとも端的に演繹的・構成的な種類のものであるとして常に割り切れるものではないだろう。経験的なものを内容の側に、構成的なものを形式の側に配置する類の知識論が必ずしもデカルトのそれを言い表しているとは言えないかもしれないのである。デカルト的な演繹的知識体系のうちで感覚的経験がなしているはずの寄与を、後にわれわれは見ようと思う。

三、感覚的観念と物質的事物における運動との記号的対応という比喻について

——否定的論拠についての検討（二）

完成期のいくつかの著作においてデカルトは、心身合一の領域に割り当てられている諸感覚と物自体における延長のあり方との間には、恣意的に（たとえ自然によるのであれ、いずれにせよ恣意的に）制定された記号的な対応関係があるだけであると主張している（『世界論』や『屈折光学』）。『世界論』における具体的な議論はこうである。「単語が人々の約束によってのみ意味を持つものでありながら、それとは何の類似性も持たない事物を私たちに理解させるに十分であるならば、自然もまたある記号を定め、私たちに光の感覚を持たせるといふことが——この記号はその

感覚に類似したものをなにも自分の内に持たないとしても——どうしてできないだろうか⁽⁵⁾。ここでデカルトが自然の信号として例えているものは、『世界論』の後の議論から分かるように、われわれの感覚器官に対する接触刺激であるか、またはそれに引き続いて生じるとされる動物精気の運動のことである。いずれにせよそれらは延長的世界における出来事であり、われわれの意識に現象する感覚的質としての光とそれら延長的出来事との間には類似性がなく、あるのはせいぜい記号における指示関係にも似た対応の関係だけであるというのが、ここでのデカルトの見解であろう。ロデイス＝レヴィスはこの記号関係への示唆を強く取って、こうした形での感覚的意識現象と物理的世界との分断と関係付けの仕方が、デカルト哲学の構想に対する機会原因論的解釈をうながすことになる、と注釈している⁽⁶⁾。しかしわれわれとしては、当該のデカルトの議論における感覚的意識現象と物理的世界との分断の仕方がそうした解釈をうながす類のものであると必ずしもとらえる必要はないと考える。当該箇所での記号的対応という比喻は、記号の制定の恣意性に重点を置いてなされているものなのか、それとも類似性に依拠することのない一定の規則的対応が存在するということに重点を置いてなされているのかということについてはなお議論の余地があるであろう。また、後に第六省察についてみるように、そもそもデカルトは自分の二元論的構想が機会原因論的なものとして解釈されることをあらかじめ拒否しているのである。ロデイス＝レヴィスの読みは、デカルト哲学における永遠真理創造説（数学的な真理性ないし論理的な真理性もまた、神による制定に由来することがらであるとする説）の機能を非常に広く取るもので、この読み方のために、観念と物自体との記号的対応関係についての上に見たような解釈が生じていると言えるだろう。しかし永遠真理創造説が外的実体の本質認識の全般に渡って効力を持つものであるとはわれわれは考えない。後にも述べるように、われわれとしては、永遠真理創造説を援用した形而上学的弁明が必要になると

思われるのは、外的実体が何であるかを知ることについてではなく、そうした実体がわれわれの直接的意識経験を越えたところでのどのようなあり方をしているのかということをめぐってのわれわれの推論能力についてであると考えらる。

四、延長とは非可感的性質であるとはどのような意味で言われるのか

主要著作においてしばしば見られるような、延長体とは感覚や想像力によってではなくもっぱら知性によってとらえられるところのものであるというデカルトの主張は、次のような形でその哲学についての解釈をうながしてきたと言えるだろう。すなわち、延長体は何であるかはその主要属性たる延長を通して知られることであるのだから、デカルトの当の主張は延長という属性そのものの非可感性を言うものである。あるいはそうでないのだとすれば、われわれは可感的性質のその下に、知られることのない実体を取り残すということにならざるをえないだろう、と。われわれはしかしここで、こうした形での結論に先立って、延長が非可感的であるとはそもそもどのような意味において言われることであるのかをあらためて問うてみることにしたい。

デカルトが延長体の本質を論じている顕著な箇所として、「物質的な事物の本質について。そして今いちど神について、神は存在するということ。」と題された第五省察の冒頭における幾何学的三角形についての議論および、その議論をめぐっての『省察』付録におけるガッサンディとデカルトのやりとりを取り上げることができるだろう。第五省察冒頭でのデカルトの議論は次のようなものである。たとえば私が幾何学的三角形を想像する場合、いくつこの

とが気付かれる。そうした三角形はかつてこの世界のうちに存在したことはないし、存在することもないだろうということ。それにしても自分はそうした三角形の特性について、自分の恣意によるのではないいくつかの認識を持つことができるということ。

なお、そうした三角形の観念はもしかすると感覚器官を介して外的な事物から私に到来したのであろう、それと
いうのもつまり、三角の形状をもった物体を時折は私は見たことがあるから、と私が言うとしても、事物
には係わりがないのである。というのは、私には、私のうちにかつて感覚を介して滑りこんできた「のではない
か」、という何らの疑念もありえないところの他の無数の図形を、考え出すことができ、それでいてしかし「そ
れでも」、それらの図形については、三角形の場合に劣らず、さまざまな特性を私は論証することができる、か
らである。⁽⁷⁾

本論でのわれわれの考察にとって重要なのは、この議論の中に登場する三角形の身分である。より詳しく言うなら、
そうした三角形を形作るところの延長という性質の身分である。われわれが問題としたいのは次の二点である。一つ
は、そうした三角形はおそらく現実の世界には存在しないだろうとデカルトが言うとき、この存在否定の意味は何で
あるかということである。もう一つは、そうした三角形の観念はかつて感覚を通して自分に到来したようなものでは
ないのだというデカルトの主張をどう理解するかということである。

これら二つの問題に対する当面の答えは、第五省察の当該箇所を直接、間接にめぐつての『省察』付録でのガッサ

ンディとデカルトのやりとりから得ることができる。ガッサンディはその反論全般を通じて、幾何学的三角形およびその諸特質の観念といったものは、感覚的経験において与えられた個々の三角形から抽象され形成されたものに他ならない、と主張している。そしてそれらがそうした抽象観念である以上、その対象が現実には存在することはない。この観点からガッサンディはとりわけ、上に引用した第五省察での議論に呼応して第六省察冒頭で述べられている次のような主張、すなわち、「すでに少なくとも私は物質的な事物「ども」が、純粹数学の対象であるというかぎりにおいては、存在しうる、ということを知っている」⁽⁸⁾という主張に異を唱えている。「点、線、面や、それらから構成される不可分なものや不可分な状態にあるもの等のごとき純粹数学の対象は、現実には存在しえないのです……物質的な事物は純粹数学の対象ではなく、複合数学「応用数学」の対象なのです」⁽⁹⁾とガッサンディは言う。これに対するデカルトの答弁は先の二つの問題に一挙に答えを与えている。デカルトは、ガッサンディの抽象観念説は退けつつも、純粹数学の対象の存在をめぐるガッサンディのこの主張はそれとして認めている。⁽¹⁰⁾純粹数学の対象は「現実には」存在しえないものであるという理解が、例の三角形の存在否定の意味であるということになる。そして現実には存在しない対象である以上、そうした対象についての知識は経験から得られたものではありえない。これが例の三角形の観念はかつて感覚を通して自分に到来したようなものではないのだという主張の意味である。

純粹数学の対象は現実には存在しないということのデカルトの容認は、まさにガッサンディ流の抽象観念説を拒否することに結びついていた。ガッサンディはと言えば、自身の抽象観念説の立場から純粹数学の対象といったものの現実存在を否定しているのである。この点をめぐってのデカルトの答弁は重ねてガッサンディに異を唱えるものであり、それにしても物質的事物がその本性において幾何学的本質に適合しないということはガッサンディが言うほど自

明なことではない、と続けられている。デカルトの意見としては、純粹数学の対象は現実には存在しないが、現実存在するものの本質としては存在するということになる。ここでも、デカルトが「現実には存在しない」と主張するのはどういう意味においてであるのかをさらに確認しておこう。答弁の少し後の部分ではデカルトは、実際に感覚的経験において与えられる図形はあまりにも粗雑であり、幾何学的対象が担うべき厳密性に欠けていると述べている。⁽¹¹⁾ 例の三角形あるいは純粹数学の対象一般は現実の世界には存在しないというデカルトの主張は、それらが感覚的経験の対象として端的に与えられることはない、ということの意味しているのである。

以上の確認を踏まえた上でわれわれは次のような問いを提示したい。それは、デカルトが物質的事物の本質について主張している非可感性は、そうした本質と感覚的経験においてわれわれの意識に現象していることがらとの類的區別といった強い区別を含意するものだろうか、という問いである。物質的事物の本質としてそれに帰属させられる延長の諸規定が非可感的であることの理由としてデカルトが挙げるものとしては、すでにみてきたような厳密性の欠如と、もう一つ、自体的な相において想定された延長的事物のあり方の微小さとが考えられよう。上の問いに答えるために、この二点についても少し立ち入って考えてみたい。

まず図形における厳密性の欠如であるが、これについてデカルトが持ち出していたのは、実際の感覚的経験においては厳密な直線なり曲線なりは与えられることはないといった経験的な種類の議論であった。換言すれば、物質的事物の自体相としての延長の諸様態が感覚的経験において与えられることは、事実上ほとんどありえないにしても、原理的には可能だということである。この点の拒否をデカルトの主張は含んでいない。事実デカルトはガッサンディへの答弁の中、先に見た厳密性の欠如を主張する直前の箇所では、「幾何学者によって考察されるがごとき図形」[ども]

が世界のうちで与えられうる、ということ疑いをいれぬところ」であると述べている。¹²⁾ 厳密性の事実上の欠如は、こうした原理上の可能性を踏まえて持ち出されているのである。

しかし別の角度から考えるなら、幾何学的三角形はこの世界には存在しないと主張されるのは、そうした図形とはある種の理念であるとデカルトが考えているからだ、とも言えそうである。この場合問題となる厳密性とは単に測定上のものではなく、知性による一定の操作の成果として目指される厳密性、理念的に設定された厳密性であると言わべきだろう。実際デカルトは、そうした操作の可能性を、伝統的な幾何学を代数学化することに成功したときに手に入れているのである。しかしそうであるとした場合にも、感覚を超えていると言われるべきなのはまさに知性の操作およびその成果として置かれる一定の規定であって、そうした幾何学的操作における素材としての延長がそれ自体の身分として非可感的な性質のもの、すなわち「この世界のうちで」与えられないところのものになると考える必要はないであろう。事実デカルト自身、主要著作期の哲学的諸議論のかたわらで、幾何学的問題の解決に当たっては実際の図形を利用し続けているのである。目の前に存在するある程度規則的な形象を単なる形象と受け取るかそれとも幾何学的図形と受け取るかは、その形象自体ではなく知性における理念化の能力の有無に依存したことからであると言わべきだろう。後年のデカルトとビュルマンとの次のような対話は、この問題についてのデカルトの考えを示すものであると思われる。

したがって、はじめて昔子供時代に三角形の図形を紙に描いたのを見たときには、その図形は、どういう仕方
で真の三角形が、幾何学者たちによって考察されるように把握されるべきかを私たちに教えてくれることはでき

なかった。というのも、真の三角形がその図形のなかに含まれていたその含まれたは、あたかも木の素材のなかでのメルクリウス「の像」と違わなかったからである。〔第五答弁。458 ページ。VII, 382〕

〔問〕——しかし不完全なその三角形からあなたは完全な三角形を描き出すのです。実は、なぜあの不完全な三角形が私に、それ自身のよりもむしろ完全な三角形の観念を示すのでしょうか。

答——それはいずれをも示すのですが……

〔問〕——しかしはじめにそれ自身を示し、つぎに自分から完全な三角形を示します。なぜなら完全な三角形をそこからあなたは演繹するからです。

答——しかしそのようなことはありません。というのは、私のうちに完全な三角形の観念があるのでなければ、不完全な三角形を私は把握できないはずだからです。後者は前者の否定なのですから。したがって、三角形を見て私は完全な三角形を把握し、それとの比較からつぎに私が見ている三角形が不完全であることに気づくのです。⁽³⁴⁾

引用の対話中におけるデカルトの意見は、幾何学的三角形は実際上の図形において示されることは可能である、しかしその図形によって初めて示されるということは可能ではない、というふうに理解できるだろう。「私のうちに完全な三角形がある」とは、ここでのわれわれの言葉で言えば、三角形の幾何学的図形としての完全性は、ただわれわれの知性が存在することによって初めて可能になることがらである、ということになる。先に見たデカルトとガッサンデイの論争の本質的な点は、この「知識が何によって可能になるか」という点をめぐってのものであって、延長とい

う属性およびその諸規定が世界の内で与えられるかどうかということにあるのではないと言えるだろう。

次に、物質的事物の自体相としてデカルトが想定しているあり方はあまりに微小なレベルのものであって、たとえそうしたレベルにおける物質の活動が感覚器官を刺激してわれわれの意識に特定の感覚的質を現象させるのだと言われるとしても、それらの物質の延長的存在のあり方がそのまま意識における感覚的質として現象することはない、という問題を考えてみよう。この問題は物質的対象の形象がそのまま共通感覚、想像力を経て精神に至るとされていた『規則論』第十二節での認識論にはなかったものであり、一六三〇年代の『世界論』や『屈折光学』において新たにあらわれてきたものである。しかしこの問題においてもデカルトの議論はやはり経験的な種類のものである。微小物質のあり方が意識における感覚的質としてあらわれることがないのは、まさにそうした物質の微小さのためではない。デカルトが微小物質に帰属させている延長的存在の諸性質は、可感的レベルでの経験において意識される延長的存在の諸性質とは別のものであるとあえて考える理由は見当たらないのである。物質的事物の本質としてデカルトが確定しようとしているところのものは何ら新しい種類の本質ではないと考えてよいだろう。

この問題をめぐって最後に以下の点を確認しておきたい。それは、ここで問題となるような三角形が「存在する」ないし「存在しない」と言うときの、デカルトの言葉の多義性についてである。デカルトの最終的な見解はあくまでも、すでに引いた第六省察冒頭での「物質的な事物〔ども〕」が、純粹数学の対象であるというかぎりにおいては、存在しうる」というものである。この点についての修正の必要をデカルトが述べている箇所はない。他方上に見てきた『反論と答弁』でのガッサンディとのやりとりにおいては、デカルトは純粹数学の対象は現実には存在しないと認めていたのである。この食い違いは以下のように理解されるべきだろう。すなわち、答弁におけるデカルトの言い方は

ガッサンデイの言い方を借りたものであり、そこでの「存在しない」とは感覚的経験の対象として与えられることは実際にはない、ということの意味していたのである。他方『省察』本文における「存在する」とは、事実上の感覚的経験可能性を超えてなお存在する、という意味である。

五、延長とは物質的実体の一般的あり方（基本的属性）

であるとはどのような意味で言われるのか

次にもう一つ別の論点からわれわれの解釈を続けてみたい。その論点とは、延長とは物質的実体の一般的あり方（基本的属性）であるというデカルトの主張はどのような意味でなされているのか、ということである。われわれの感覚的意識内容がわれわれの外部に広がる世界のそれ自体としてのあり方を伝えるものではないと考えること、外部世界とわれわれ知覚者との間には即座には意識化されないような特有の交渉があり、そうした交渉がわれわれの意識内容を規定しているのだと考えることは、デカルト哲学に固有のことではない。また、外部世界に存在する物自体の性質としてただ延長（および固性ないし不可入性）だけを想定することの正当な理由は何であるかということについても今回は措く。ここで問題としたいのは、デカルトが延長を物質的事物のあり方であるとするそのことの中で見られる、デカルトの議論の特質である。

第六省察においてデカルトは、延長体の観念とは、その対象がわれわれの外部に実際に存在しないにもかかわらず神がわれわれの精神に直接に送り届けている観念なのではないか、というありうる反論（マルブランシュないしバ

クリ風の議論）に対して、延長体の観念とは、その観念において表示されているところのものがわれわれの外部にあるとわれわれに自然に信じさせるような観念である、ということ論拠として（それゆえ、われわれにそう信じさせるような観念を、外的対象がないのにわれわれに送り届けているのだとすれば、神とは欺瞞者であるということになるだろう、という風に）反論を行っている。⁽¹⁴⁾ この議論において今のわれわれに重要なのは、延長体の観念において表示されているところのものはわれわれの外部に存在するものであるという信憑である。もし延長体というものが純粹に知性的な構成物であるとすれば、外部的な実在性についての以上のような信憑がそうしたものに必然的に伴うという事態は説明のつかないものとなってしまいうだろう。むしろ、延長的外界についての前反省的な信憑を、学的に反省されたものとしての延長体がお継承的に帯びているのだという風に考えるべきなのではないか。ただし第六省察の当該箇所での議論は物質的事物の存在証明を目指してなされているものである。観念として見られた延長体の本質がそうした存在信憑と無関係であると言ふ必要はないであろうが、われわれは以下に、本質の問題における類似の議論をデカルト哲学の中に指摘し検討していくことにしたい。

まず比較的早い時期でのものとして、『世界論』第六章における次のような議論を挙げることができるだろう。「哲学者たち」の自然学すなわちアリストテレス流の自然学に自分が新たに（空想として）構想しつつある自然学を対置しつつ、デカルトはこう述べる、「この混沌『デカルトが想定しつつある宇宙の原初的狀態』をそれでつくった物質とはいえば、生命のない被造物の内にすらそれ以上単純なものもそれ以上認識しやすいものもなく、その観念は私たちの認像力がつくりうるあらゆる観念の内に含まれており、あなたがた『哲学者たち』もそれを理解するか、そうでなければなにも想像できないか、どちらかにならざるをえない……。『しかし』彼ら『哲学者たち』の言う第一質料

——それがかなり認識しにくいものであることは彼らも知っているのだが——の記憶が、私の言う物質の認識から彼らをそらすおそれもあるから、私はここで彼らに次のように言っておかなければならない。私のまちがいでなければ、彼らが第一質料について感じる困難はすべて、彼らがそれをそれ自身の量と外的延長、すなわちそれが持つ空間を占めるといふ特性から区別しようとすることから来ているすぎない⁽⁴⁵⁾。この第一質料としての実体という理解に対してデカルトは、自分が『世界論』で述べてきた「物質の量」は「数が数えられる事物と異なる以上にはその実体と異なるものではない」なく、また「物質の延長やそれが持つ空間を占めるといふ特性」は、物質の「偶有性としてでなくその真の形相として、またその本質として」理解されるべきものであると主張する (ibid.)。延長という性質は物質にとって付随的に言われるようなものではないとは、物質とはそれが存在するとすれば延長体として存在するところのものである、ということであろう。それゆえ延長とは「物質の実体と異ならない」(ibid.)。そして「この物質をそういう仕方で考えることがきわめて容易である」というこの点が、アリストテレス的自然学者たちの議論に対する自分の議論の優位性の根拠であるのだとデカルトは締めくくっている (ibid.)。同様の議論は『方法序説』第五部の、公刊されなかった『世界論』を念頭に置きつつ書かれたと思われる次のような箇所にも見られる。「私はつぎのように、ことさらはつきり、想定しさえした……つまり「自分が仮想世界に想定した」その物質のなかにはへ学校で論議しているようなへ形相へあるいはへ性質へなどは何ひとつないし、一般にどんなものでも、その認識が私たちの魂に生まれながらそなわつていて、知らないとは仮想すらできないほどでないものは何ひとつない⁽⁴⁶⁾」。ここでもまた、物質的事物のもとにその本質として帰属させられるものとは、そうすることがわれわれにとってあまりに自明であるようなところのものである。この自明さは物質的事物の本質についてのデカルトの議論の基調なのである。

なお、どちらの議論においても主張の仮説性が断られているが、デカルトが自分の議論のどの部分をもって仮説的であるとしているのかは注意する必要がある。争点は、物質的実体とは延長するものであるかどうかということではなく、物質的実体において延長以外の諸性質を認める必要があるのかどうかということにある。デカルトにとって重要なのは、それまでの自然学が物質的実体に帰属させてきた諸性質に換えて新たな性質を発見ないし仮定することではなく、それら諸性質のうち、物質的事物についての知識の構成分としては何が切り捨て可能なものであるのかを明らかにすることなのである。

上の引用にあらわれたような延長と物質的実体との同等視はデカルト哲学の初期から完成期に至るまで一貫しているということも、この問題をめぐってのデカルト哲学のいわば策のなさ、策を講じることの必要性を証示していると言える。以下にいくつかの引用を列挙する形でこのことを確認しておきたい。たとえば『規則論』第14節では

ここで延長というのは、他から独立な、主体そのものから離れた、或るものを指すのではなく、さような哲学的存在 (*entia philosophica*) をわれわれはこの世界に認めない……。かかるものは決して想像の中に入っていないものなのである。なぜなら、例えば、自然の中のすべての延長体 (*extensum*) が無に帰しても延長 (*extensio*) そのものはそれ自身のみで存在しうる、と信じる人がありうるにしても、その人は、この延長を考えるのに、物的観念を用いているのではなくて、ただ誤った判断を下す悟性を用いているだけなのである。その人みずから、次いで自己の想像の内に画こうと努めるところの延長の像そのものを、注意深く反省するならば、上のことを承認するであろう。というのは、かれは気付くであろうからである、自分が延長の像をばすべての主体か

ら離れたものとしては決して覚知せず、想像は判断とは全く異なった仕方で行われること、従ってかの抽象的存在は（悟性が事物の真理についてどう考えようと）想像においては決して主体を離れたものとして形成されないこと。⁽⁷⁷⁾

あるいは

「物体は延長をもつ」「という言い方を検討すると」……ここでは「延長」が物体とは異なるものを意味していることはよく分る。けれどもわれらが想像の内に形成するのは、二つの別々の観念、一は物体の観念他は延長のそれ、なのではなく、延長せる物体の観念ただ一つだけである。⁽⁷⁸⁾

と言われ、後年の『哲学原理』第一部第六二節と第六三節とはそれぞれ

「理論的区別（理性的区別）」とは、実体と、この実体のある属性、しかもそれなくしてはその実体が理解されないような属性との間にある区別であり……実体からそのような属性を排除するならば、その実体についての明晰判明な観念を形成することができない。⁽⁷⁹⁾

思考と延長とは、それぞれ知的な実体と物的な実体との本性を構成するものとみなすことができる。そして、

デカルト哲学における延長体の本質について

この場合、思考と延長とはそれぞれ、考える実体そのもの、および延長のある実体そのもの、いいかえると、精神と物体としてのみ考えられるべき「である」……考えるとか延長しているとかいうことを無視して、実体をそれだけとして理解するよりも、延長のある実体とか考える実体とかを理解するほうが、より容易なのである。なぜなら、実体の概念と思考または延長の概念とが異なるのはただ理論的（理性的）にでしかないから。⁽²⁰⁾

と言われている。延長体の認識をめぐっての想像力の役割の変化については先に触れたが、その点の変化を除いてはデカルトの議論は『規則論』および『原理』において同質のものとして続いている。要点は相変わらず、もし延長体としてでなければ、われわれは外的実体としての物質的事物のことをそもそも理解することができないだろうということの主張にある。たしかに、なぜ延長体としてのみそうした物のことが理解されるのかということについてはなお議論の余地があるし、実際デカルトはさまざまな箇所でそのことの論証に努めてもいる。あらかじめ断つたように、それについてはここでは触れない。他方でしかし、なぜ物質的実体の属性の少なくとも主要なものの一つが延長なのであるかについては、デカルト哲学においてとりわけ設けられたような何らの論証も見出すことはできないのである。これは、延長が物質的実体の属性であるとはデカルト哲学にとつて物質的実体に対する外的命名や仮説的設定といったものではないからである。物質的実体の属性としての延長という認識は、デカルトの自然学的議論全体に対してむしろ前提的に働いているのだと考えるべきだろう。

六、われわれの感覚器官に衝突し、

諸々の感覚的観念の原因となるような微小物質について

デカルトは、われわれが持つ感覚的諸観念（色・音・匂い・手触り、大きさといった延長）の原因となるものとして、われわれの感覚器官に衝突し刺激を与えるような、運動する微小物質を考えている。この物質にデカルトが帰属させるのは、延長上の一定の形をもつことと固性（不可入性）をもつことである。はつきりさせる必要があるのは、感覚的観念として現れる延長と、ここで感覚的諸観念の原因とされる微小物質がもつ性質としての延長の関係である。これら二つの延長は、同じ延長という言葉で呼ばれるにしても実際には異なる性質なのだろうか。それともやはり同じ性質なのだろうか。本論でのわれわれの解釈によれば、同じ言葉で呼ばれる二種類の異なる性質と考えるわけにはいかない。というのも、もしそうなら微小物質がもつところの性質を「延長」と呼ぶことの根拠を見出せないからである。これはわれわれが本論において避けることを試みた困難である。他方、感覚的観念において見出される延長と微小物質がもつところの性質としての延長とを同じ種類のものと考えることに、次のような困難があるように思われる。すなわち、微小物質の運動の結果として感覚的諸観念が生じるのだとすれば、こうした原因と結果の間には質的な非連続性を想定せざるをえないと思われるからである。事実色や音や匂いにおいては原因となる延長的運動とのそうした質的な非連続性は明らかである。延長についての感覚的観念だけは特権性をもつということになるのだろうか。われわれの考えはこうである。微小物質の性質である限りでの延長をわれわれが直接に感覚知覚すること

はない、われわれが特定の延長的・感覚的観念をもつとき、物理的世界においては、微小物質の特定の配置があり特定の運動が生じているのであって、そうした配置や運動は、われわれがそのとき持っている感覚的観念には直接的には似ていない（『規則論』はこの点についての反省を欠いていた）。では間接的な類似、あるいは言い方を変えれば一般的な類似は存在しないのだろうか。そうした類似があるとわれわれは考える。デカルト哲学において、微小物質のあり方についての表象は、感覚的に知覚可能なレベルでの物のあり方（ただし延長的あり方に限る）の引き写しであると言える。以上に見てきたような延長という性質の位置付け難さをデカルト自身自覚していたらうということとは、次のようなデカルトの言い方からうかがうことができる。

われわれは長さ、幅、深さの延長をもつ何らかの事物を感覚しているし、あるいは、感覚から刺激されつつ明晰判明に覚知している。それはさまざまの形を備え、さまざまの運動を行い、色、匂い、苦痛等のさまざまの感覚をわれわれが持つようにしているものである。（que nous sentons, ou plutôt que nos sens nous excitent souvent à apercevoir clairement et distinctement, une matiere etendue en longueur, largeur et profondeur, dont les parties. . . ont des figures et des mouvements divers, d'où procedent les sentimens que nous avons des couleurs, des odeurs, de la douleur, etc）⁽²¹⁾

われわれは延長的事物を感覚する、というよりむしろ、感覚器官に刺激されてそうした事物を知覚するのだとデカルトは言い換えている。それでもしかし、そうした事態全体を指して「われわれは感覚する」と呼ぶような語法は残る

だろう。事実引用文の最後にあらわれる *«les sentiments des couleurs, des odeurs. . .»* という言葉は再びこの語法で使われている。感覚という語のデカルトにおけるこの多義性は、上に見てきたような延長という性質の位置付けを反映しているのだと言えるだろう。

七、主要著作における形而上学的弁明とわれわれの解釈との関係について

最後に、デカルトの主要著作における本質認識の妥当性をめぐる形而上学的弁明と、本論でわれわれが試みてきた解釈との関係についてごく簡単に触れておきたい。私見によれば、デカルトの主要著作における本質認識の妥当性をめぐる形而上学的弁明は、一つには本論中でも幾度か触れた問題である、物質的事物の本質として延長以外の本質を排除することができるのはなぜかをめぐって、またもう一つには、われわれの理性における推論秩序と直接的な感覚経験において与えられない世界のあり方との間になぜ客観的対応がありうるのかをめぐってなされている。つまりそれらの弁明は、そうした世界の本質としてわれわれがそもそも何を想定するかということを基礎付けようとするものではない。それゆえ、『規則論』においては見られなかったような種類の形而上学的弁明が主要著作においては見られるということは、延長体の身分をめぐる本論での解釈に対立することがらではないと言えるだろう。

むすび

以上にデカルト哲学における延長体の身分に関して確認してきたことは、その属性としての延長の、一、質における感覚的経験とのつながり、二、非仮説性の二点であつた。この二点の理由から、デカルト哲学によれば外的実体の本質を知ることがはわれわれにとって何ら困難なことではない、あるいは言い方を変えれば、知識論において問題になるようなことがらではないということになると言えるだろう。そうした困難のなさ、「容易さ」を、まさにデカルト自身しばしば主張していたのである。外的実体がそれ自体として何であるかということの経験的既知性ないし経験的認識可能性がデカルト自然学の根底にあるというそのことは、デカルト哲学における自然学的知識全体の身分をあらかじめ実在論的なものとして一定に方向付けていると考えることができるだろう。また、思想的な問題としては、以上の考察は次のような見方をいくらかは提供できたのではないかと思う。すなわち、たしかにデカルト哲学は合理主義的な演繹的議論の色濃い哲学であるが、だからといって、われわれの事実上の世界経験がこの哲学の原理的な部分において何らの寄与をも果たしていないというわけではないことである。

注

以下、A.T. は『アダン・タンヌリ版デカルト全集』の略とし、それに続く数字はローマ数字がその巻数、アラビア数字が頁数をそれぞれ指す。「著作集第*巻」に続く数字は白水社版『デカルト著作集』（増補版）の頁数を指す。本文中におけるデカルトからの引用には『精神指導の規則』については岩波文庫の邦訳を用い、その他については白水社版『デカルト著作集』の邦訳

を用いた。

(2) (1) 岩波文庫『精神指導の規則』p. 106, A. T. X, p. 441.

「精神の洞見」によってとは、第二省察における著名な「蜜論の分析」の箇所の言葉だが、「蜜蠟の分析」をそうした主張と読むことには問題があるかもしれない。香川知晶氏はその論文「精神の洞見と「実体」」(『現代デカルト論集三 日本篇』所収、勁草書房、一九九六)において、ペイサードの読解に賛同しつつ、問題の箇所で主題的にねらわれているのは物質的事物の属性ではなく、むしろその非可感的な実体性である、と論じている。そうであれば、そこで知性のみによって知られるとされるのは、延長ではなく、その基体たる実体であるということになるだろう。しかし「蜜蠟の分析」の真意がどうあれ、ここでとりあげつつあるデカルト的延長体の身分の問題はそれとして残る。

(4) (3) 著作集第二巻 p. 54, A. T. IX, p. 29.

感覚的知識についてのこうした見解はすでに『規則論』においてはほぼ同様な形で定式化されている。「もし悟性が、自分に示される事物を、それが悟性みずからの中に或いは想像の中に容れられている通りに、正確に直観するのみであって、その上、想像力が感覚の対象を忠実に示しているとか、感覚が物の真の形を帯びているとか、また外物が現象する通りに常に存在するものだとか、判断することがなければ、悟性は決して経験によって欺かれることがない」。第十二規則。岩波文庫『精神指導の規則』p. 85, A. T. X, p. 423.

(5) 著作集第四巻 p. 131, A. T. XI, p. 4.

(6) Geneviève Rodis-Lewis, *L'œuvre de Descartes*, Vrin, 1971, p. 151-153. 邦訳 G・ロデイス＝レヴィス著『デカルトの著作と体系』紀伊國屋書店、1990, p. 166-168.

(7) 著作集第二巻 p. 86, A. T. IX, p. 51.

(8) 著作集第二巻 p. 93, A. T. IX, p. 57.

(9) 著作集第二巻 p. 391, A. T. VII, p. 328-329.

(10) 著作集第二巻 p. 456-457, A. T. VII, p. 380-381.

(11) 著作集第二巻 p. 458, A. T. VII, p. 381.

デカルト哲学における延長体の本質について

デカルト哲学における延長体の本質について

八六

- (12) 著作集第二巻 p. 457, A. T. VII, p. 380-381.
(13) 著作集第四巻 p. 364-365, A. T. V, p. 161-162.
(14) 著作集第二巻 p. 101, A. T. IX, p. 63.
(15) 著作集第四巻 p. 155-156, A. T. XI, p. 35-36. 「」内は引用者による補い。
(16) 著作集第一巻 p. 48, A. T. VI, p. 42-43. への引用文におけるデカルトの物言いは生得観念説との連関を示唆するものである
と言えるだろうが、生得観念説を引き合いに出せば、ここでわれわれが取り組んでいる延長ないし延長体の問題がすべて解消
する、ということにはならないだろう。延長およびその諸特質という本質の丸々全体が生得観念としてわれわれに与えられ
ている、といった主張はあまりに漠然としすぎている。本論では直接に論じることができなかったが、デカルトが生得観念
説を援用しつつ行っている議論は、所与に関して経験的に集められた情報の全体を超えるような知識をわれわれは持つとい
うこと、そうした知識を持つための何らかの原理がわれわれ人間主観のうちにはあるのだということの主眼にしていると私
は考えている。
- (17) 岩波文庫『精神指導の規則』p. 108, A. T. X, p. 442-443.
(18) 岩波文庫『精神指導の規則』p. 109, A. T. X, p. 444. 「」内は引用者による補い。
(19) 著作集第三巻 p. 67, A. T. IX, p. 53.
(20) 著作集第三巻 p. 68, A. T. IX, p. 53-54.
(21) 『哲学原理』第二部第一節、著作集第三巻 p. 81, A. T. IX, p. 63.